# 辺境での学びから持続可能な社会を考える

## ―― ユニセフシアター第3回上映会レポート ――

昨年 11 月 23 日、ピースおおさか（大阪市）でユニセフシアター第 3 回上映会が開かれ（主催：大阪ユニセフ協会）、約 80 人が参加した。命懸けで学校に通う子どもたちの姿を追った『世界の果ての通学路』（2012 年、仏）を上映後、「映画から学んだこと」をテーマに、大阪星光学院中学校 2 年生と専修学校クラーク高等学院大阪梅田校 2・3 年生が研究発表を行った。（河合洋成）

### ◎大阪星光学院中学校生徒による発表

**ウクライナ侵攻とアフリカの食糧危機**

ロシアによるウクライナ侵攻の前から、アフリカの食糧危機は問題視されていた。2 ～ 3 人に 1 人は食糧不足で、2020 年には 1 億 5,500 万人にのぼり、アフリカの角では過去 40 年間で最悪の干ばつが発生。被害は東京都と同程度の人数に達した。

さらに、ウクライナ侵攻で、小麦生産国のウクライナ、ロシア両国の支援に頼っていたアフリカは厳しくなった。

食糧危機を止める方法は、

①**理想的な案**　停戦すれば、穀物の安定供給ができる。しかし、停戦の見通しは立っていないので難しい。

②**現実的な案**　（輸出ルートだった）黒海封鎖をやめさせるため、首脳会談も行っている中国にロシアへ働きかけてもらう。

③**独自案**　他国からの穀物輸入を増やす。候補は、アフリカとたくさんの貿易をしているフランスを挙げたい。

④**今後を見据えた案**　自給自足ができるよう、食糧危機が起きたときの回復力（レジリエンス）となる知識や技術の習得が大切だ。

大阪星光学院中学校の生徒発表

**アマゾンの森林破壊**

映画冒頭で土を掘って水を汲み出すシーンを見て、環境問題を考えた。

世界最大級の熱帯雨林で、世界の森林の 30％を占めるアマゾン。ここ 25 年で急速な森林破壊が見られ、日本の 3.4 倍の 130 万平方キロが失われた。パーム油の農園開発と焼畑農業が主因。地球温暖化の促進と生態系の破壊が懸念されている。

1940 年代から大開発が進み、広大な土地を利用し、主に肉牛の飼育、輸出用大豆栽培が行われている。牛肉の生産量増加、バイオ燃料への利用のためで、ブラジルの人たちは豊かになりたいという思いがある。その半面、環境破壊がもたらされている。解決のためには、

①**ペーパーレス化**　紙の節約、デジタル化により、木材伐採を止められる。

②**家畜に代わる食糧**　牛の放牧で森林が奪われている。培養肉の普及が考えられる。

③**経済特区をつくる**　内陸部だと森林伐採が進むので、沿岸部に特区を設置。国が豊かになれば、伐採の必要がなくなる。

（残念なことに、シアター開催直前に学級閉鎖のため 1 チームの出場が取り止めとなった）

### ◎専修学校クラーク高等学院大阪梅田校生徒による発表

**学校に通えない子どもたち**

2018 年の統計では、世界で約 2 億 5,840 万人を数え、最も多い国では 3 人に 1 人が学校に行けていない。理由として、貧しい国・地域では学校の数が少ない。▽家から遠すぎて通えない。▽先生を育てる仕組みがなく、給料を払えない……など。

十分な教育を小学校で実行するには、推計で 2030 年までに 2,600 万人の教師が必要だ。

専修学校クラーク高等学院の生徒発表

また、最新統計では 5 ～ 14 歳の約 1 億 2,000 万人が児童労働をしている。戦争に巻き込まれ、少年兵として駆り出される子どももいる。

だが、質の高い教育を受けることで、女性は家計収入を増やす機会を持てる。貧困の連鎖を断ち切り、所得格差を少なくできる。人々に健康で自活的な生活をもたらし、平和な社会の実現に貢献する。そのためには、①すべての子どもたちに質の高い義務教育を提供する。②教師の質が低い問題解決のため、教師の教育に力を入れる。教え子の学びに直結する。

## 日本とアフリカの教育問題を比較

日本では少子高齢化で過疎化が進み、過疎化が社会問題になり、若者の教育に影響を与えている。

アフリカではどうか。多くの支援を受けているが、政府が教育にお金をかけていない。それは、貧困下では子どもは労働力だから。世界で最貧の上位 5 カ国はアフリカで占められており、紛争や戦争で政治情勢は不安定だ。例えば、最貧国のブルンジでは内戦で子どもたちが兵士とされ、国が義務教育などの学習支援ができていない状況だ。

一方で、ケニアは初等、中等教育が無償。東アフリカでは最大規模の経済力だからだ。小学校就学率は 92・5%。卒業率は 82%。アフリカ全体の平均 63%に対して高い。けれども、世界は 91%なので平均以下にある。

解決策として、「スクールオブディエア」（School of the air）を提案。オーストラリアで 100 年前に始まり、内陸部の子どもたちが郵便で教材を受け取り、先生とやりとりしていた。今はインターネットの普及でオンライン授業を受けられるようになっている。

## まとめ／映画とSDGsの関係を考えた

SDGs（持続可能な開発目標）17 項目のうち、映画は①貧困をなくそう、④質の高い教育をみんなに、⑥安全な水とトイレを世界中に、⑯平和と公正をすべての人に、が当てはまる。

- 貧困問題を抱える国の一つが南スーダン。難民は約 228 万人を数える。低所得の国では 10 人に 7 人が 10 歳までに簡単な文章を理解し、読むことができない。
- 水の問題も、インドでは水道水が日本の数十倍の汚染度で、手洗いの水がすでに汚れている。そうしたなか、日本は安全な水を飲むことが難しい国を助けている。
- 生活環境が良くない国では、男子より女子が学校に行けていない。日本からランドセルを寄付したところ、男女問わず平等にランドセルが渡され、親たちも「学校に行かせたほうが良い」と考えるようになり、心境に変化が出ているという例もある。
- 子どもたちがより良い教育を受け、学びを生かして仕事を得ることができれば、地域の活性化に貢献できる。

この映画を見て将来にどう役立つか。

世界には登校するだけでも困難な子どもたちがいる、私たちの今が当たり前ではなく、何よりもこの瞬間、映画で見た光景が現実に起こっていることを忘れないことだ。

## ◎映画『世界の果ての通学路』（パスカル・プリッソン監督、77 分）

社会背景や生活環境が全く違う 4 カ国で、道なき道を何時間もかけて学校まで通う子どもたちに焦点をあてたドキュメンタリー作品。

登場するのはケニア（15 キロ、2 時間）、モロッコ（22 キロ、4 時間）、アルゼンチン（18 キロ、1 時間半）、インド（4 キロ、1 時間 15 分）。ケニアでは危険なアフリカ象を避け、モロッコでは幾つもの山を乗り越えるなど、過酷な道のりは日本では想像もつかない。それでも、苦労してまで通学するのは「医師になりたい」「パイロットになりたい」と、かなえたい将来の夢があるから。まっすぐな瞳で勉強ができる喜びを語る姿に希望の光が見える。

両校は昨年夏、同映画を鑑賞後、学習に取り組んだ。大阪星光学院中学校は初めて、専修学校クラーク高等学院大阪梅田校は昨年に続く参加。会場には両校の生徒がまとめた研究成果のポスターも張り出された。

両校生徒